

宮澤賢治 生誕120周年記念連載

銀河鉄道の夜空へ 八

Al Nokta ĉielo de la Galaksia Fervojo

いっかくじゅう区 おおいぬ区 アルゴ区

文：渡部潤一／「銀河鉄道の夜空へ」制作委員会 写真：飯島 裕／山根 悟 協力：宮沢賢治記念館



★これまでの連載記事はwebでご覧いただけます。
[https://www.nao.ac.jp/about-naoj/
reports/naoj-news/milky-way-train/](https://www.nao.ac.jp/about-naoj/reports/naoj-news/milky-way-train/)

★本記事は『新校本宮澤賢治全集』（筑摩書房刊）を基礎資料・出典として作られています。



いっかくじゅう区

近づいてきたバラ星雲に気を取られていると、逆の窓側からきらきらとさざめくような光が飛び込んできた。

「うわー、きれい！」

子供たちがいっせいに叫ぶ。霧の中から突然現れた大きな樹木に光が点々と灯っていた。これは前に見た龍灯なのだろうか。いわきの龍灯も最後は阿迦井岳の中腹で特定の木に集まって光るのだと聞いたことがある。しかし、龍灯が見えたのはずいぶんと前で、場所も違うし、光り方も違う気がする。暗い三角標にマークとなる灯りがたくさん付いているのもありえない。

「クリスマスツリー星団、NGC 2264 だなあ」

石川くんが呟いた。ああ、そうか、と私は納得した。いっかくじゅう座のクリスマスツリー星団だ。冬はそれほどの輝きはなく、やや寂しいとはいえ、なんといっても天の川沿いである。たくさんの星雲星団があるところだから、ある意味、こうしたのが見えるのは自然なのだろう。

点滅する光を見ながら、いっちゃんと呼ばれる少年が叫んだ。

「ユニコーン、露をふらせ」

あっ、と思った。ここでもオリジナルはケンタウルスだったはずだ。それがユニコーンになっている。確かにオリジナルでは、それまで眠っていた男の子が窓を見ながら叫ぶシーンがあった。たくさんの豆電燈がまるで千の蛍でも集ったようについていたはずだ。では、今夜はユニコーン祭りなのだろうか。ここはユニコーンの村なのだろうか。

みな黙ったまま、惜しむように大きなバラの花、そしてクリスマスツリーが遠ざかっていくのを眺めていた。私も黙っていたが頭の中はぐるぐる回転し、混乱していた。そもそも賢治の設定した銀河鉄道の夜は、比較的、物語の設定前後に亡くなった人たちが乗り合わせるものだったはずだ。東日本大震災で亡くなったとおぼしき方々なら、まだわかる。10年ほどの時しか経っていないからだ。しかし、目の前に現れたのは、もう45年も前に亡くなったはずの中学時代の同級生・石川靖くんである。

クリスマスツリー星団

ベテルギウス

バラ星雲

オリオン座

いっかくじゅう座

リゲル

かもめ星雲

シリウス

確かに、あれからもういちど靖くんに会いたいと願っていた。ご実家は遠かったので、葬儀には出席できなかったが、中学時代の星仲間みんなで休みの日にお線香を上げに行ったことがある。まだ制服を着ていたので、中学校在学中のことだったのだろう。いつも集まる仲間が一人足りないという違和感に、寂しさというよりも信じられないという気持ちのほうが強かったことを覚えている。ひょっこりと、そのあたりから現れて、会話に加わるような気がしてならなかった。死というものを完全に理解していたわけではない歳頃だったのだろう。だが、ご実家に到着し、仏壇に飾られた靖くんの顔を改めて見ると、もう話すこともできないのだ、と急にある種の感情が湧いてきたのを覚えている。それは理不尽に似た怒りを含んだ、やるせない切なさや寂しさだった。もういちど、もう一回だけ話したい、そんな願いを賢治さんは聞いてくれたのだろうか。そのために、私をこの列車に乗せてくれたのだろうか。そして靖くんが、この北回り銀河鉄道での私にとってのカンパネルラだったのだろうか。そういえば、いっかくじゅう座のモデルとなっているユニコーンは、夢を叶えてくれるという。私の夢を叶えてくれたのだろうか。

振り返ると、靖くんは相変わらず、にこにこしながら、窓外の景色を見つめていた。何を見るでもなく、じっと外を見つめる姿は、中学時代の彼の姿そのものだった。坊主頭が窓外の光に照らされていた。それにしても、何を話せば良いのだろうか。実際、目の前に現れると、何も言えない自分がいた。と、突然、石川くんが話し始めた。もののみごとに会津弁である。

「本当に天文学者になったのかよう。偉えなあ」

そうだった。あの頃も、よく星仲間で将来の夢を語り合っていた。私は天文学者になる、石川くんは父を継いで医者になると。

「いや、なーんも」

そう言うのが精一杯で、私は二の句が継げなかった。どうして知っているのか。死者は天上から下界を見ているのだろうか。それとも、この会話そのものも、私の脳内で作り上げられた幻想なのだろうか。「おれは事故っちまったからなあ」

そうだった。実家近くの道路でトラックにぶつかったと聞いていた。そのまま地域医療の中心だった、石川くんの父がやっている病院に運び込まれた

のだ。しかし、もはや手遅れだったという。

「親父には悪りいことしたっけなあ」

靖くんは、私の思いを悟ったかのように呟いた。父は運び込まれた息子の変わり果てた姿に、「もういいぞ、もういいぞ」と言いながら、自ら処置をしていたのだという。どんなにか辛かったことだろう。そんな父に、靖くんはあやまりたかったのだろうか。

オリジナルだと、まだ北十字を過ぎたばかりの頃に、カンパネルラがジョバンニに呟く「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか」という台詞があった。靖くんはカンパネルラとはずいぶんシチュエーションが違うと思った。ジョバンニは最後までカンパネルラが天上へ行く途中だというのを自覚せずに物語が進んでいた。目の前に居る靖くんは、すでにその事実を自らも認め、それを明らかにしている。そしてジョバンニとは、まったくシチュエーションが異なる自分がいた。私も靖くんが亡くなったことを既に知っているからだ。

ただ、共通しているのはカンパネルラも靖くんも逆縁だったことだ。先立つ不孝を許してほしい、という気持ちは多かれ少なかれ誰しもが持つものなのだろう。ただ、今の私には靖くんの父の気持ちがよくわかる。だから思わず言った。

「そんなこと、ねえよ」

その言葉にも靖くんは窓の外の見つめて微動だにしなかった。それも昔と変わらなかった。靖くんは、当時、星仲間での会話の最中でも、ふっと遠くを見つめ始めると、話題が自分に振られても、そのままの状態だったことが何度もあった。ああ、当時そのままの靖くん。私はそう思いながら、さらに言葉を継ごうとしたときだった。進行方向前方で何かがぴかっと光った。

「うわ、なにか爆発したよ」

子どもたちがいっせいに騒ぎ出した。いっちゃんと呼ばれていた男の子も左手の窓を食い入るように見つめて、感嘆の声を上げていた。

「すごい、何かが広がっていくよ。花びらが開いていくみたいだ」

その視線の先を見て驚いた。スローモーションのように、光の輪が広がっていくのが見える。光が達したところで、暗かった領域を明るく照らし出し、その範囲がどんどん広がっていた。ライトエコーだった。「こりゃ、V838 じゃないか…」



クリスマスツリー星団 (NGC 2264・画像左側中央)

いっかくじゅう座の散開星団を含む星雲。距離は2300光年ほどで、NGC 2264としては南側に位置する尖った暗黒星雲「コーン星雲」を含む。ツリー全体は画面下(南)向きの逆さ構図で、ツリーの先っぽにコーン星雲がその先端を上(北)向きにして見えており、その北側に赤く輝く星雲が大きなツリーに、付近に輝く星々が電飾に見立てられる。いっかくじゅう座S星がツリーの根元でひとときわ青く光っている。
クレジット：Satoru YAMANE

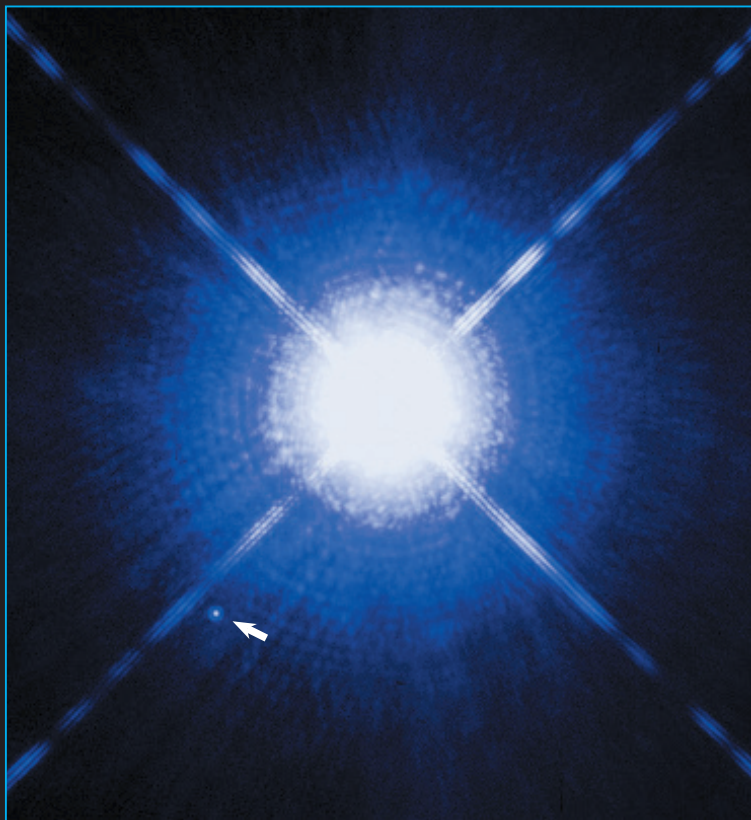
いっかくじゅう座 V838

1万9000光年ほどの距離にある特異変光星。2002年に爆発的に増光し、いっかくじゅう座の新星とも呼ばれたが、後にこの変光星名が付与された。増光時の光がこの星の周囲の星間物質に到達し、そこからの反射光を観測することで、あたかも拡散していくように見える「ライト・エコー現象」である。この星間物質は星本体からかつて放出されたものとの推測もあるが、増光の原因も含めてよくわかっていない。
クレジット：NASA, ESA and H.E. Bond (STScI)





かもめ星雲 (IC 2177)
かもめ星雲は Sh 2-292 を鳥の頭部として、その東側 (左側) にある星雲 Sh 2-296 が光と影とで大きく羽を広げた姿をかたどっている。頭部の Sh 2-292 は中心に Be 型星である HD 53367 を抱き、IC 2177 とも呼ばれる。全体は、いっかくじゅう座のわし星雲とも呼ばれる水素電離領域である。
クレジット: Satoru YAMANE



シリウス
おおいて座の一等星で、視等級はマイナス 1.5 等と全天で最も明るい恒星。距離も 8.6 光年という近距離星である。固有運動の揺らぎから伴星の存在が示唆されており、1862 年 1 月 31 日アメリカの天体望遠鏡製作者であるクラークが口径 18.5 インチの屈折望遠鏡を製作し、そのテスト観測中に伴星シリウス B を発見した (矢印)。最初期に発見された白色矮星で、主星 A と周期 50 年ほどの連星系を為している (★→p23)。
クレジット: NASA, ESA, H. Bond (STScI), and M. Barstow (University of Leicester)

いっかくじゅう座の特異変光星だ。爆発的に増光したのは 2002 年だったはずだ。いま、目の前に繰り広げられている景色に唾然とした。やはりあらゆる時空を超えている。だいたい、リアルタイムだとその変化は追えないはずだ。この列車は、数々の実在する天体のハイライトを、まるで遊園地のアトラクションのように見せてくれるのだろうか。いっかくじゅう座という目立たない星座の中でも、バラ星雲やこの星は代表的な天体であることはまちがいない。

● おおいぬ区

その様子を見ながら、そういえば、このライトエコーが広がっていく様子を撮影したハッブル宇宙望遠鏡の画像を用いて、塵の雲が広がっている範囲を答えよ、というような大学院入試問題を作ったことがあったなあ、と思い出していた。光速とこの星までの距離を与えれば、加減乗除だけで計算できる簡単なものだったが、その問題が採用されたかどうかは覚えていない。

「きれいだなあ」

靖くんもその美しさに見とれていた。靖くんにかけるべき言葉も忘れてしまっていた。そのライトエコーに見とれているうち、私は、その向こうにひときわ明るい三角標があるのに気づいた。天の川の向こう岸に建っている、今までに見たことのないような明るさの三角標だ。近づいてくるにつれ、その三角標の上の光る部分は青白い玉になっていて、なんだかふらついているようだった。

「シリウスだ」

私よりも先に、靖くんが呟く。

「シリウス？」

海上保安庁職員が尋ねてきた。靖くんは、私に視線を送ってきた。ああ、私が説明しろということか。そう思うと、シリウスはおおいぬ座という星座の一等星で、全天で最も明るい恒星であることをかいつまんで話した。子供たちも黙って聞いてくれた。話しながら、この列車における私の役割は一体何なんだろう、と改めて思った。

「潤一くん、大事なこと、抜けてっぺ」

話が一息ついたところで、靖くんが言った。そして、天文学的に大事なシリウスの伴星、白色矮星について話を始めたのである。よく見ると、シリウス

とおぼしき三角標の灯りのそばにはとても小さな暗い灯りが付き添っている。

オリジナルではアルビレオの観測所で、「眼もさめるような、青宝玉 (サファイア) と黄玉 (トパーズ) の大きな 2 つのすきとおった球が、輪になってしずかにくるくるとまわっているくだりがあった。しかし、アルビレオが連星か、単なる見かけの二重星か、という問題は、21 世紀になって高精度位置観測から後者である可能性が高くなっていた。ぐるぐるまわっていないようなのである。

一方、こちらは発見からすぐに連星であることが確定していた。ぐるぐるまわっている星なのである。しかも相手の伴星は、天文学的にも重要な白色矮星である。靖くんはわかりやすく歴史も含めて、紹介していた。ああ、靖くんらしいなあ、と感心して聞いていた。近づいてみると、確かに輝かしいシリウスの主星とおぼしき玉のまわりに小さな点のような暗い玉が見え、それら 2 つが大きさや輝きにふさわしくないようにお互いのまわりを回っていることがわかる。そのせいで主星のシリウスも遠くから見るとふらふらと動いているように思えたのだろう。

ということは、ここはおおいぬ座だ。どっかに犬が走り回っているか、探してみたが見つめることはできなかった。そういえば、一匹は闘牛場にいたなあ、とぼんやり思い出した。犬の代わりに、空をカモメが飛んでいた。見ているうちに、その数がどんどんふえていった。カモメはオリジナルでは登場しないのに、と思っていると、多数のカモメがコラーージュのように遠方で 1 つの形を作っていた。羽を広げたカモメに見えた。

「ああ、あれ鳥の形だわ」

窓の外を見て、理科少女が呟く。確かに、いっかくじゅう座で輝くかもめ星雲 IC 2177 なのだろう。実際にシリウスの北東にある散光星雲で、かつてはいっかくじゅう座のわし星雲とも呼ばれていた見事な水素電離領域である。

シリウスBチャレンジ

シリウスBは8等星なので、通常なら天体望遠鏡で見える明るさだが、なにせシリウスAが近くにあって明るく、分離して眺めることは難しい。ただ、連星系の軌道が楕円であるため、2023年現在、主星から10秒角以上と、最も離れた位置にあり、見やすい時期であることもあって「シリウスBチャレンジ」というキャンペーンも行われている。
<https://www.ananscience.jp/siriusb/>



アルゴ区

そんなカモメの大群が織りなす造形に見とれてい
るうち、なんだか子供たちが騒がしくなった。今度
は何だろう、と期待をする私がいた。と、前方に現
れたのは、大きな帆船だった。きらきらと輝く天の
川の水面に浮かんでいる。その姿は、ギリシア時代
の帆船のようだった。星座神話はギリシアで神々の
物語と結びついてできているから当然なのだろう。

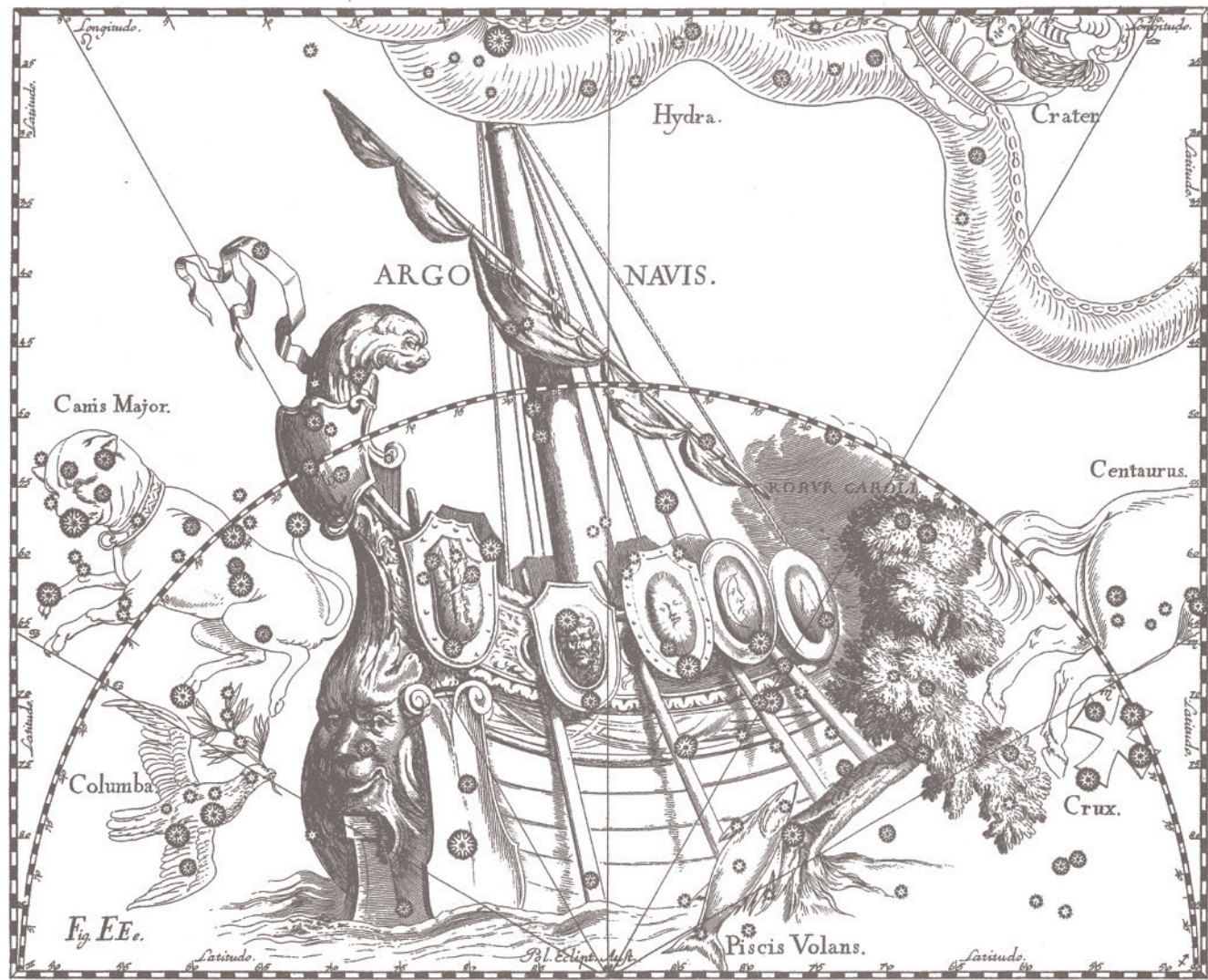
「アルゴ船だ」

アルゴ座は巨大すぎたため、国際天文学連合が星座を定めた時に、とも座、らしんばん座、ほ座、りゅうこつ座の4つの星座に領域が分割された。それぞれが船のパーツである。こんどはどんな天体が現れるのだろう。目の前の靖くんと、星空の名所を望遠鏡で巡っているような気分になったのである。

「あの船、変な形してるなあ。それにひもを垂らしているよ」

いっちゃんが言った。私は、そのひもが碇を繋いでいるロープではないか、と直感した。そうだった。その碇は、津波で船がひっくり返ったとき、天の川のほとりでいかり星、つまりカシオペヤ座になったのだ。それにしては、そのときと船がまったく違うじゃないか。そう思いながらも、この鉄道で見聞きするすべてに、その種の論理や筋道が通じないのだろうとも考えて、妙に納得した自分がいた。どこかの断片だけがつながっていたりするのだ。人生もそんなものなのかもしれない。見事な帆船は、近づくにつれて輝きをその細部がわかるほどになったが、中に誰か乗っている様子はなかった。帆船が浮かぶ天の川の風景は幻想的だった。そして、どんどん川を南下し続けていくのだった。(続く)

→ 次は「終着駅サウザンクロス」



アルゴ座（フラムスティード星座図絵）

銀河鉄道の夜空へ

ダイヤグラム Vol.07 北辰本線

宮澤賢治が著した「銀河鉄道の夜」は、カムパネルラの死出の旅が描かれますが、その実在のモデルとして、賢治最愛の妹であった「宮沢トシ（1898～1922）」の名が挙げられます。将来を嘱望されながら夭折したトシの死は、賢治に大きな喪失感を与え、その心情は「永訣の朝」など多くの作品に著されました。トシ臨終時の賢治のようすは、「いよいよ末期に近づいたとき、トシの耳もとでお題目を叫び、トシは二度うなづくようにして午後八時三十分逝く。享年二四歳。押入れに首をつっこんで慟哭する★01」。お題目とは、日蓮宗における「南無妙法蓮華經」の7文字のことで、法華經に帰依していた賢治の信仰心の篤さが窺えます。

翌1923年7月、賢治は花巻農学校の教え子の就職斡旋の目的で、当時日本領だった樺太への旅行を計画しますが、賢治にとってはトシの喪失感を癒すための旅でもありました。ちょうど同年5月に、鉄道省によって北海道・稚内と樺太・大泊を結ぶ稚泊連絡航路が開設さ

れたばかりで、そこから樺太鉄道を乗り継げば、北端の駅「栄浜（北緯47度24分37秒）」に行くことが可能です。そして、傷心を抱えながら、鉄道好きの賢治さんがトシとの魂の交信を求めて北限への旅を決意したのは、日蓮宗が北辰信仰と深い繋がりがあったからかもしれません（北辰妙見信仰）。北辰は北極星のことで、それを宇宙の中心として祀る信仰です（現在の北極星はこぐま座α星です）。その北辰がもっとも天高く昇る地で、彼岸に渡ったトシとの交感を試みる旅は、賢治にとって必然の弔いの儀式でもあったのかもしれません。1923年7月31日夜、生徒2人を同伴した賢治は花巻駅で列車に乗り込みます。これから、東北本線、青函航路、函館本線、宗谷線、稚泊航路、樺太東線、泊栄線を経て栄浜駅へと至る全約1400キロメートルの「北辰本線」の旅が始まります。そして、それは、ジョバンニとカンパネラを乗せて幻想四次の軌道を疾走する銀河鉄道のダイヤグラムと密接にシンクロしていくことになるのです。



上の全天星図は、1922年
11月28日05時30分の樺太・栄
浜のもの。27日20時30分にトシが亡
くなったこの夜は月齢9の月が深夜に沈み、
はくちょう座が北十字として北西の地平に立ち、
南の空には煌びやかな冬の星座たちが昇ります。さらに時
が経った05時30分、銀河はちょうど南北方位の地平線に接し、北辰は高く、
この地では、はくちょう座の α 星デネブ(赤緯+45° 16' 49')が周極星となって
地平線下に沈みません。……するとどこかで、不思議な声が、銀河ステーション、
銀河ステーション……果たして、そこで出会ったのは……(★02)。

★01 「新校本宮澤賢治全集」
第十六巻・年譜編（筑摩書房刊）

★02 ただし、第一次稿（1924年末ころに成立?）、第二次稿（1925年以降に成立?）には、「銀河ステーション」の項は存在せず、はくちょう座（北十字）も「あの北の十字のときのやうに」の記述のみ。逆に第一次稿、第二次稿には「大犬座のまばゆい三角標」が登場し、これはシリウス（星図右下／解説は22ページ参照）を示すと考えられる。

画像：ステラナビゲータ（アストローツ）